

資料

Web シラバスにみる看護学士課程におけるフィジカルアセスメント教育の実態

The Actual Condition of Physical Assessment Education in the Bachelor's Program of Nursing as Seen in the Web Syllabus

本谷久美子, 塩見直子

Kumiko Motoya, Naoko Shiomi

キーワード：看護学士課程, フィジカルアセスメント, 教育, シラバス調査

Key words : Bachelor of Nursing Program, Physical Assessment, Education, Syllabus survey

要 旨

本研究の目的は、看護学士課程におけるフィジカルアセスメント教育の実態を明らかにすることである。国公私立大学 292 課程のシラバスの記載内容を、単位数、科目区分、開講時期などの項目は単純集計、授業概要・目標は KH Coder を用いたテキストマイニング、単元名は看護師国家試験出題基準の「人体の構造と機能」の項目別に分類・集計した。

フィジカルアセスメントの科目は 92 課程 (31.5%) で開講し、単位数は「1 単位」、科目区分は「専門分野」、開講時期は「2 年前期」と「1 年後期」が多かった。授業概要・目標では“フィジカルアセスメント”“技術”の語が頻出し、共起関係は 8 カテゴリにまとめられた。単元名は、「消化器系」「呼吸器系」「循環器系」の順に多かった。フィジカルアセスメントの科目では解剖生理学等の既習知識を用いて、得られた情報から身体状態やケアの必要性を判断するための教育がなされていた。単元の順序性を考慮した授業計画の構築、アクティブ・ラーニングを効果的に組み入れ、より実践に近い状況下での演習と反復する学修機会の必要性が示唆された。

I. はじめに

近年の医療技術の進歩、急速な高齢社会に伴い、社会からは専門的な知識・技術を有し、いかなる臨床状況においても的確に判断し行動できる看護職者の輩出が期待されている。2020 年の保健師助産師看護師学校養成所指定規則（以下、指定規則）の第 5 次改正では、臨床判断能力の基盤となる解剖生理学等の内容の充実

を図る必要性が示され、専門基礎分野の「人体の構造と機能」および「疾病の成り立ちと回復の促進」の科目単位数が 1 単位増え 16 単位に改正された（厚生労働省, 2020）。看護基礎教育においては、いかに解剖生理学等の知識を活用し看護の実践に必要な臨床判断能力を育成・強化していくかが喫緊の課題である。

看護におけるフィジカルアセスメント (physical assessment) は、全身の状態を系統別に把握し、その情

受付日：2023 年 9 月 19 日, 受理日：2024 年 1 月 18 日

埼玉医科大学保健医療学部看護学科

報を整理、分析して、状態が正常であるのか、正常から逸脱しているのか、予測される問題はないかなどを判断することである（日本看護科学学会，2023）。対象の主訴を医療面接より丁寧に聴取するとともに、視診・触診・打診・聴診の技術、いわゆるフィジカルイグザミネーションを正確に実施し、それにより客観的な情報を収集する。また、得られた情報は解剖生理学や病態学といった科学的根拠に基づいて思考し、正常・異常の有無、その緊急性について判断する。すなわち、フィジカルアセスメントは身体の状態を解剖生理学等の知識を用いて判断し必要なケアを導き出すことから、看護学生（以下、学生）の臨床判断能力を養ううえで重要な科目であるといえる。

他方、文部科学省（2017）の「看護学教育モデル・コア・カリキュラム」では、フィジカルアセスメントは看護実践の基本となる専門基礎知識の大項目のなかで看護実践に共通する専門基礎技術として掲げられている。また、「看護学士課程教育におけるコアコンピテンシーと卒業時到達目標」（日本看護系大学協議会，2018）においても、「健康レベルを成長発達に応じてアセスメントする能力」を養うための教育内容として示されている。これらより、フィジカルアセスメントは対象の身体状態を把握し看護を実践するうえで必要不可欠な教育内容であり、看護学士課程においては最低限修得が求められるアセスメント技術である。

フィジカルアセスメントの科目では、双方向性 Web 教材（山内ら，2017）、プロジェクションマッピングを使用した呼吸器系のフィジカルアセスメント（山田，2022）など学生の理解を促すために ICT（Information and Communication Technology；情報通信技術）や視聴覚教材が活用されている。また、シミュレーション教育（三輪ら，2021；鈴木ら，2021）、地域住民の高齢者を模擬患者にした問診の演習（岩崎ら，2021）といったように、学生の思考や判断を育むための教育の工夫についても報告されている。さらには、卒業前の技術修得にむけて OSCE（Objective Structured Clinical Examination；客観的臨床能力試験）を活用したフィジカルアセスメントの技術試験（柏木ら，2021）についても報告がある。しかしながら、学生にとってフィジカルアセスメントの修得は容易ではなく（金子，2014；森嶋ら，2016）、看護学実習（以下、実習）においてはフィジカルイグザミネーションの実施率が低いことも報告されている（片野，2020；吉田ら，2021）。学生が実習において既習のフィジカルイグザミネーションを活用し対象の身体状態をアセスメントするためには、解剖生理学等の知識を身につけるとともに、それら知識に裏付けられた技術修得が前提であり、フィジカルアセスメントの科目のさらなる検討が必要であると考えた。

そこで本研究では、フィジカルアセスメントの科目の教育内容や教育方法を検討するにあたり、Web 上で公開されているシラバスを用いて看護学士課程におけるフィジカルアセスメント教育の実態を明らかにすることを試みた。これまでに、フィジカルアセスメントの教育に関する実態調査は行われている（篠崎ら，2006；高橋ら，2013）。しかし、それらの調査より 10 年以上が経過しており、現行のフィジカルアセスメントの教育の実態を反映していない可能性があると考えられた。

II. 研究目的

看護学士課程におけるフィジカルアセスメント教育の実態を明らかにし、フィジカルアセスメントの科目の教育内容、教育方法の示唆を得る。

III. 研究方法

1. 調査期間

2022 年 9 ～ 10 月

2. 対象

文部科学省ホームページに掲載されている医療関係技術者養成学校一覧（看護師学校）のうち、国公私立大学 292 課程のシラバスの記載内容を分析対象とした。なお、フィジカルアセスメントは基礎看護学領域の科目内、あるいはヘルスアセスメントや看護過程と同一の科目内で教授されている場合がある。その場合、フィジカルアセスメントとそれらとの教育内容の判別が難しいことから、本研究では Web 上にて検索・閲覧が可能で、かつ科目名にフィジカルアセスメントと明示されたシラバスのみを対象とした。

3. データ収集方法

各大学の Web シラバスより、単位数、科目区分、必修もしくは選択、開講時期、授業形態、授業概要・目標、単元名、科目全体に占める演習時間の割合、アクティブ・ラーニングの有無とその内容、評価方法、担当教員数の 11 項目についてデータを収集し、Excel シートに記入・整理した。

4. 分析方法

収集したデータは、授業概要・目標、単元名の項目以外は、すべて単純集計した。授業概要・目標は、樋口（2020）の計量テキスト分析の手順を参考に、KH Coder のテキストマイニングを用いて分析を行った。まず、分析の前処理として、データの誤字を含むファイルチェックを行ったうえで、語が分断され意味不明とな

る語のみ、強制的に抽出する語を指定した（例；バイタルサイン、客観的、など）。また、一語で意味をなさない語を除外した（例；基づく、得る、など）。データを KH Coder Version 3 に投入し、出現回数 ≥ 20 回の頻出語リストを作成した。さらに、語と語の関連性を測る Jaccard 係数を ≥ 0.3 に設定し、共起ネットワークを抽出し、サブグラフごとにカテゴリ名を付与した。単元名は、看護師国家試験出題基準（厚生労働省、2022）（以下、看護師出題基準）の「人体の構造と機能」の中～小項目を参考に、器官別に異なり語数で集計した。

5. 倫理的配慮

公表データの使用のため倫理審査は受けていない。Web シラバスに掲載されたデータは正確かつ適切に引用し、教育内容や方法の特徴から大学が特定されることのないよう配慮した。

IV. 結果

フィジカルアセスメントの科目は、292 課程中 92 課程（31.5%）で開講されており、設置主体別の内訳では国立 14 課程（15.2%）、公立 12 課程（13.0%）、私立 66 課程（71.8%）であった。

1. 看護系大学におけるフィジカルアセスメントの科目の位置づけ

科目の単位数は「1 単位」79 課程（85.9%）、「2 単位」13 課程（14.1%）であった。科目区分は「専門分野」87 課程（94.6%）であり、「必修科目」として開講する大学は 89 課程（96.7%）であった。開講時期では「2 年前期」36 課程（39.1%）、「1 年後期」34 課程（36.9%）の順に多く、少数ではあるものの 1 年もしくは 2 年の通年で開講する大学もあった。（表 1）

2. フィジカルアセスメントの授業概要・目標のカテゴリ化

フィジカルアセスメントの授業概要・目標の頻出語リスト（出現回数 ≥ 20 回）では、“フィジカルアセスメント”（251 語），“技術”（194 語），“看護”（176 語），“対象”（163 語），“身体”（144 語），“アセスメント”（139 語）などの語が多かった（表 2）。また、語の共起関係から《看護におけるフィジカルアセスメントの必要性や実施方法、判断の基礎を学習する》《目的・意義が説明できる》《観察から得られた対象の健康状態を把握するための知識》《身体情報を系統的に収集しアセスメントする技術》《人体の構造と機能の視点》《バイタルサインの測定》《問診・視診・触診・打診・聴診》《実践への活用と評価》の 8 カテゴリにまとめられた（図 1）。

3. フィジカルアセスメントの教育内容および教育方法

フィジカルアセスメントの単元名を、看護師出題基準の「人体の構造と機能」の中～小項目を参考に分類した結果、「消化器系」87 課程（94.6%）、「呼吸器系」84 課程（91.3%）、「循環器系」82 課程（89.1%）、「神経系」79 課程（85.9%）、「運動器系」77 課程（83.7%）、「体温調節」42 課程（45.7%）、「感覚器系」41 課程（44.6%）の順に多かった。一方で、「細胞と組織」「生体リズムと内部環境の恒常性」「血液」「代謝系」の項目に該当する単元はなかった（表 3）。

つぎに、フィジカルアセスメントの科目は 74 課程（80.4%）が「演習科目」として開講していたが、科目全体に占める演習時間の割合は「記載なし」を除くと、「30%以上 50%未満」32 課程（34.8%）、「30%未満」15 課程（16.3%）の順に多かった。88 課程（95.7%）でアクティブ・ラーニングを取り入れており、主にシミュレーターを用いた実技、事例検討、ロールプレイ、e-learning などであった。評価では「筆記試験＋レポート」が 25 課程（27.2%）で最も多く、ついで「筆記試験＋レポート＋実技試験」16 課程（17.4%）、「筆記試験＋レポート＋参加度」14 課程（15.2%）であった。担当教員数は、「4～5 名」が 30 課程（32.6%）で最も多く、ついで「2～3 名」21 課程（22.8%）であり、「10 名以上」が 9 課程（9.8%）ある一方で、「1 名」も 6 課程（6.5%）にみられた（表 1）。

V. 考察

1. フィジカルアセスメントの教育内容に関する検討

本研究では、フィジカルアセスメントの科目の教育内容や教育方法の示唆を得るために、Web シラバス調査を実施し、看護学士課程におけるフィジカルアセスメント教育の実態を明らかにした。フィジカルアセスメントの科目は 92 課程（31.5%）で開講し、「1 単位」「必修科目」が多く、カリキュラム上の位置づけでは「専門分野」の区分が多かった。看護師は、疾病の診断や医師の指示の有無にかかわらず、患者の身体状態を把握する必要がある。患者にいつもと異なる症状がみられた場合には迅速に身体情報を収集し、考えられる疾患を推測し、緊急性の有無や必要なケアを判断する。このように、フィジカルアセスメントは看護師が日常的に行う看護の基本となる教育内容であることから、「専門分野」の「必修科目」に位置づける課程が多いと考える。

授業概要・目標では、“フィジカルアセスメント”と“技術”を中心に共起関係が描かれ、“フィジカルアセスメント”ではフィジカルアセスメントの目的や意義、必要性、判断に関する理解、実践への活用と評価、“技術”では医療面接（問診）やフィジカルイグザミネーション

表1 フィジカルアセスメントの科目の開講状況 N=92

項目	内訳	n(%)
科目単位	1単位	79(85.9)
	2単位	13(14.1)
科目区分	基礎分野	0(0.0)
	専門基礎分野	5(5.4)
	専門分野	87(94.6)
必修・選択	必修	89(96.7)
	選択	3(3.3)
開講時期	1年前期	2(2.2)
	1年後期	34(36.9)
	2年前期	36(39.1)
	2年後期	9(9.8)
	3年前期	6(6.5)
	1年通年	1(1.1)
	2年通年	2(2.2)
	その他	2(2.2)
授業形態	講義科目	18(19.6)
	演習科目	74(80.4)
科目全体に占める演習時間の割合	なし	1(1.1)
	30%未満	15(16.3)
	30%以上50%未満	32(34.8)
	50%以上70%未満	14(15.2)
	70%以上80%未満	3(3.3)
	80%以上	8(8.7)
	記載なし(不明を含む)	19(20.6)
アクティブ・ラーニング	有(シミュレーターを用いた実技, 事例検討, ロールプレイなど)	88(95.7)
	無	4(4.3)
評価方法	筆記試験のみ	3(3.3)
	筆記試験+レポート	25(27.2)
	筆記試験+参加度	4(4.3)
	筆記試験+実技試験	5(5.4)
	筆記試験+レポート+参加度	14(15.2)
	筆記試験+レポート+実技試験	16(17.4)
	筆記試験+参加度+実技試験	2(2.2)
	筆記試験+レポート+参加度+実技試験	12(13.0)
その他(記載なしを含む)	11(12.0)	
担当教員数	1名	6(6.5)
	2~3名	21(22.8)
	4~5名	30(32.6)
	6~7名	19(20.7)
	8~9名	7(7.6)
	10名以上	9(9.8)

表2 フィジカルアセスメントの科目の授業概要・目標の頻出語リスト (出現回数≧20回)

抽出語	出現回数	抽出語	出現回数
フィジカルアセスメント	251	聴診	42
技術	194	視診	40
看護	176	評価	38
対象	163	学習	37
身体	144	収集	37
アセスメント	139	活用	36
必要	119	基礎	36
情報	116	系統的	31
状態	113	目的	31
理解	112	バイタルサイン	29
フィジカルイグザミネーション	109	人体	28
知識	106	能力	28
基本	97	重要	27
説明	97	修得	26
健康	92	構造	25
方法	91	視点	25
学ぶ	77	ケア	24
実施	75	診察	24
観察	69	生活	24
意義	66	測定	24
機能	52	結果	23
把握	49	正確	23
問診	47	態度	23
実践	45	援助	22
判断	44	技法	22
触診	42	問題	20
打診	42		

を用いた健康状態の把握のための知識、バイタルサイン測定や解剖生理学の知識を用いたアセスメントが主な内容として示された。正確な身体情報を収集するためには、医療面接やフィジカルイグザミネーション、バイタルサイン測定の技術修得が必要である。また、得られた身体情報から正常・異常の判断、考えられる疾患の推論および緊急性の判断には、解剖生理学や疾患・病態といった専門的な知識が必要である。このように、フィジカルアセスメントの科目では身体情報の収集と身体状態の判断のための知識と技術の教育がなされていた。指定規則第5次改正（厚生労働省，2019）において臨床判断の基盤強化がいわれているが、フィジカルアセスメントは収集した身体情報を解剖生理学等の知識を用いて思考して判断し、必要なケアの実践へとつなげていくことから、そ

の教育は学生の臨床判断能力を育成し強化することにもなると考える。

一方、単元名では「消化器系」「呼吸器系」「循環器系」「神経系」「運動器系」がいずれも80%以上で多く、「体温調節」「感覚器系」は約半数の課程にみられた。山内（2020）は、「フィジカルアセスメントには、『生きている』生命体である人間を観察するためのフィジカルアセスメントと生活に直結する『生きていく』ためのフィジカルアセスメントとがある」としている。急変時のバイタルサインの変化を含め、生命維持に直結する呼吸器系・循環器系を中心としたフィジカルアセスメントは重要であり、学生は対象の生命維持機能の変調に気づき適切に対処するための能力を身につける必要がある。また、看護の対象は生活者であるため、対象がその人らしい生活を

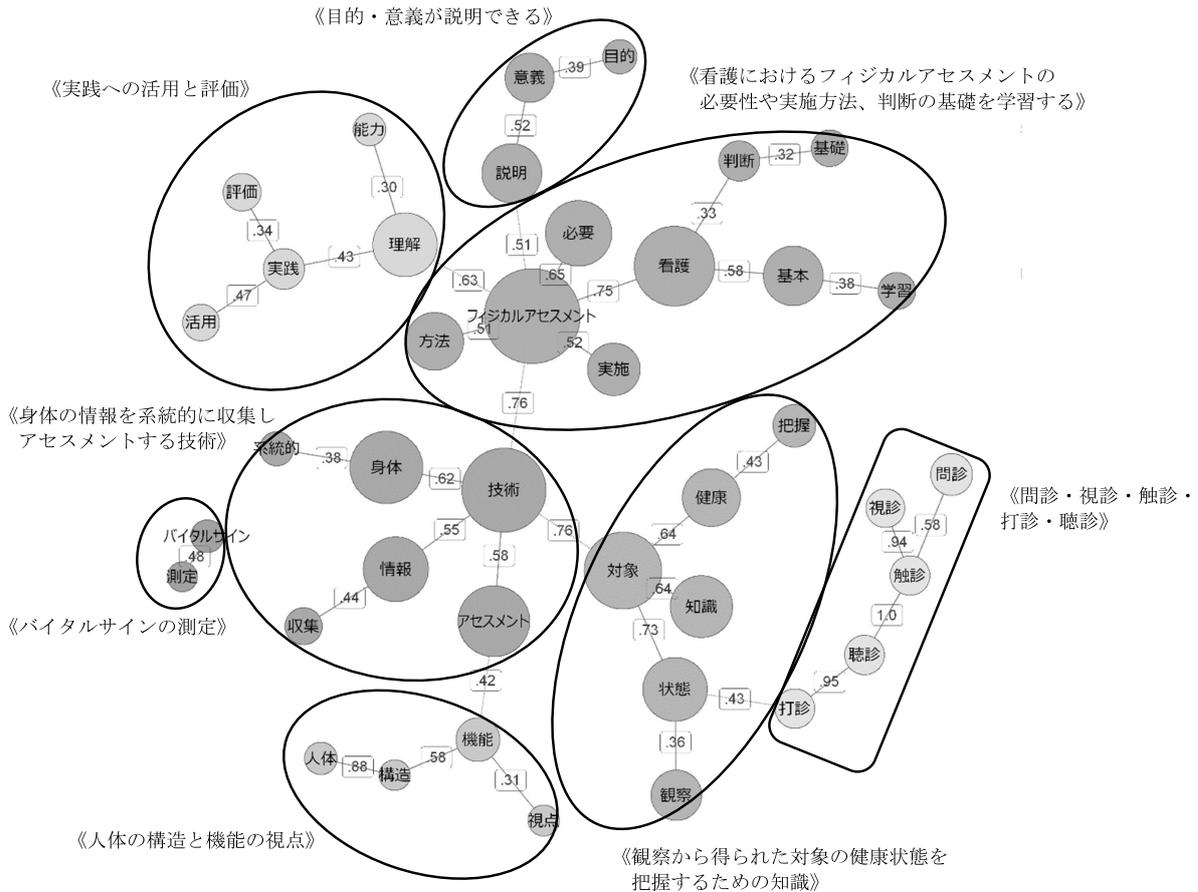


図1 フィジカルアセスメントの科目の授業概要・目標のカテゴリ化（共起ネットワーク）

表3 看護師国家試験出題基準「人体の構造と機能」の項目別に見たフィジカルアセスメントの科目の単元名（頻出順）

		N = 92	
№	大項目	単元名の例*	n(%)**
1	消化器系	消化器系, 腹部, 口腔, 咽頭, 嚥下, 食べる, 栄養を取り込む, 排泄する, 食べることに関連した観察, 直腸・肛門, など	87(94.6)
2	呼吸器系	呼吸器系, 胸部, 胸部・肺, 呼吸音の聴取, バイタルサイン(呼吸), 呼吸器疾患の事例を用いたフィジカルアセスメント, など	84(91.3)
3	循環器系	循環器系, 胸部, 心臓, リンパ系, 心音の聴取, バイタルサイン(脈拍・血圧)心電図の測定・読み方, など	82(89.1)
4	神経系	神経系, 脳神経系, 脳神経系の身体診察など	79(85.9)
5	運動器系	運動器系, 筋・骨格系, 身体を動かす機能, 活動・運動, 動作・姿勢保持, 関節可動域, など	77(83.7)
6	体温調節	バイタルサイン(体温), 体温(腋窩温), 見る・聴く・嗅ぐ・味わう・触れる・話す機能, など	42(45.7)
7	感覚器系	感覚器系, 感覚系, 感覚器(眼・耳・鼻・口), など	41(44.6)
8	生体の防御機構	皮膚, 粘膜, 外皮系, 外表皮系(皮膚), など	22(23.9)
9	生殖器系	生殖器系, 生殖系, 乳房, 生殖器(男性生殖器・乳房), など	21(22.8)
10	泌尿器系	泌尿器系, 腎・泌尿器系, など	12(13.0)
11	成長と老化	小児, 高齢者, 加齢の変化, など	5(5.4)
12	体液	体液のバランス, 体液・電解質バランス	2(2.2)
13	内分泌系	頭頸部(甲状腺)	2(2.2)
14	細胞と組織		0(0.0)
15	生体リズムと内部環境の恒常性		0(0.0)
16	血液		0(0.0)
17	代謝系		0(0.0)

* 単元名は一部省略し, 内容のみを示している。

** 異なり語数でカウントしているため, 2回目以上の同項目はカウントしていない。

維持するのに深く関係する消化器系・中枢神経系・運動器系・感覚器系といったフィジカルアセスメントの修得も当然必要である。さらに、山内(2020)は「呼吸器系・循環器系を中心とした実践的なフィジカルアセスメントに絞って学習させたあとに、中枢神経系・感覚系・運動系といった生活に結びつくフィジカルアセスメントを身につけられるようにカリキュラムを構築すべきである」と述べている。このことから、フィジカルアセスメントではこれらの単元を網羅しつつ、身体の中核機能にかかわる単元から部分といった順序性も考慮して科目の授業計画を構築する必要性が示唆された。

2. フィジカルアセスメントの教育方法と実践への活用にむけた課題

フィジカルアセスメントの科目は74課程(80.4%)が「演習科目」として開講し、シミュレーターを用いた実技、事例検討、ロールプレイ、e-learningなどのアクティブ・ラーニングを取り入れていた。しかしその一方で、科目全体に占める演習時間の割合は少なく、半数以上が「50%未満」であった。アクティブ・ラーニングは、教員による一方的な講義形式とは異なり、学習者の能動的、主体的な学習への参加を取り入れた教授・学習法の総称である(文部科学省, 2020)。フィジカルアセスメントであれば、例えば呼吸音や心音が聴取できるシミュレーターを用いて音を聴取し自ら解答を探したり、グループで事例を検討しアセスメントを共有したりすることである。Dale(1961)の「経験の円錐」に示されるように、単に講義で知識を教授されるよりも学生間で討論したり実際に体験したりする方が知識や技術の定着率はよいとされている。そのため講義で知識を得たあとに、それらの知識を使ってグループワークや体験といった演習、いわゆるアクティブ・ラーニングを効果的に組み入れることで学生の理解がより深まり知識の定着につながるかと考える。

また、フィジカルアセスメントの科目は「2年前期」(39.1%)や「1年後期」(36.9%)の低学年次に開講する課程が多かった。一般に、看護学士課程における領域別看護学実習は3年次に開講されることが多く、フィジカルアセスメントの科目履修から1年以上が経過し学生の得た知識や理解が薄れてしまう可能性が考えられる。そのためフィジカルアセスメントの科目に留まらず、各看護学領域の科目においてもフィジカルアセスメントの既習知識や技術を確認し、反復する学修機会を設ける必要がある。

さらに、フィジカルアセスメントの教育は学内演習時に学生同士で実践できるというだけでなく、学生同士の練習を十分に積み、実際に臨床患者への実践につながる事が大切であると考えられる。近年、看護学士課程におい

てはシミュレーションやOSCE(阿部, 2016)、携帯電話やタブレット端末などを活用したm-learning(mobile-learning)(遠藤ら, 2020)、VR(Virtual Reality)教材(内藤ら, 2018)の導入が進み、それらは臨床現場で必要とされる判断力・技術力の育成に有用とされている。学生が実習で受け持つ対象にフィジカルアセスメントを実践していけるように、学内ではICTや視聴覚教材、シミュレーター等を積極的に活用し、より実践に近い状況下での演習を行っていくことが課題である。

VI. 本研究の限界と今後の課題

本研究の結果は、Webシラバスより読み取れる範囲内の教育の実態であり、またフィジカルアセスメントと明示された科目のシラバスのみを対象にしているため、看護学士課程におけるフィジカルアセスメント教育の全容を明らかにしたとはいえない。今後は、本研究より明らかとなったフィジカルアセスメント教育の実態を参考に、科目の授業計画を再編し評価していくことが課題である。

VII. 結論

本研究では、看護学士課程におけるフィジカルアセスメント教育の実態を明らかにするためにWebシラバス調査を実施した。フィジカルアセスメントの科目は92課程(31.5%)で開講し、解剖生理学等の既習知識を用いて、バイタルサイン測定やフィジカルイグザミネーション等で得られた情報から身体状態やケアの必要性を判断するための教育がなされていた。呼吸器系・循環器系・消化器系・神経系・運動器系・感覚器系などの単元を網羅し、それらの順序性を考慮した授業計画の構築、アクティブ・ラーニングを効果的に組み入れるとともに、より実践に近い状況下での演習と反復する学修機会の必要性が示唆された。

付 記

本研究は、日本看護学教育学会第33回学術集会において発表した。

利益相反

本研究における利益相反はない。

著者貢献度

K.Mは研究の着想および研究デザイン、データ収集

および分析，論文執筆のプロセス全体に貢献した。NS はデータの分析，論文全体の構成とチェックに貢献した。すべての著者は最終原稿を読み，承諾した。

文 献

- 阿部幸恵 (2016) : 看護のためのシミュレーション教育 第 2 版, 日本看護協会出版会, 東京.
- Dale, E. (1961) : Audio-visual methods in teaching. Holt, Rinehart & Winston of Canada Ltd.
- 遠藤恭子, 板倉朋世, 河野かおり (2020) : 看護基礎教育におけるフィジカルアセスメント教育の現状— m-learning の視点から—, 教育システム情報学会誌, **37** (3), 218-223.
- 樋口耕一 (2020) : 社会調査のための計量テキスト分析 内容分析の継承と発展を目指して, ナカニシヤ出版, 京都.
- 岩崎真子, 岡田純子, 中橋苗代, 梶谷佳子 (2021) : 模擬患者演習での問診における看護学部 1 年生のコミュニケーションの工夫と学び, 京都橘大学研究紀要, **47**, 173-184.
- 金子真弓 (2014) : フィジカルアセスメント事例演習における看護学生の問診の特徴と課題, 宇部フロンティア看護学ジャーナル, **7** (1), 29-35.
- 柏木ゆきえ, 小林由美子, 野里同, 小坂未来, 三浦まゆみ (2021) : OSCE を活用したフィジカルアセスメントの技術試験の取り組みと学生の振り返りからみた課題, 岩手看護学会誌, **15** (2), 70-77.
- 片野恵美子 (2020) : 看護教育機関における臨地実習での学生のフィジカルアセスメント実施状況とその関連要因についての文献研究, 中京学院大学紀要, **10** (1), 1-11.
- 厚生労働省 (2022) : 看護師国家試験出題基準, <https://www.mhlw.go.jp/stf/houdou/2r9852000002ylby-att/2r985200000311lx.pdf>, 2023.1.31.
- 厚生労働省 (2020) : 「看護師等養成所の運営に関する指導ガイドラインについて」の一部改正について, <https://www.mhlw.go.jp/hourei/doc/tsuchi/T201105G0040.pdf>, 2023.1.31.
- 厚生労働省 (2019) : 看護基礎教育検討会報告書, <https://www.mhlw.go.jp/content/10805000/000557411.pdf>, 2023.1.31.
- 三輪晃子, 宗内桂, 服部智子, 奥村英則 (2021) : 看護学実習における困難事例を用いたシミュレーション学習の効果, 日本赤十字広島看護大学紀要, **21**, 1-9.
- 文部科学省 (2020) : 大学における教育内容等の改革状況について (平成 30 年度), https://www.mext.go.jp/a-menu/koutou/daigaku/04052801/1417336_00007.htm, 2023.7.3.
- 文部科学省 (2017) : 看護学教育のモデル・コア・カリキュラム～「学士課程においてコアとなる看護実践能力」の修得を目指した学修目標～, https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/koutou/078/gaiyou/_icsFiles/afiedfile/2017/10/31/1397885_1.pdf, 2023.1.31.
- 森嶋道子, 岡田純子, 森本ゆう子 (2016) : フィジカルアセスメント授業における看護学生の問診の実態, 摂南大学看護学研究, **4** (1), 11-19.
- 内藤知佐子, 山川みやえ (2018) : 【VR で未来を変える】VR 体験とこれからのケアをつなぐ学習プログラム ループリック評価, 教員の活用方法とともに, 看護教育, **59** (2), 100-108.
- 日本看護科学学会 (2023) : 看護学を構成する重要な用語集, <https://www.jans.or.jp/uploads/files/committee/yogoshu.pdf>, 2023.1.31.
- 日本看護系大学協議会 (2018) : 「看護学士課程教育におけるコアコンピテンシーと卒業時到達目標」, <https://www.janpu.or.jp/file/corecompetency.pdf>, 2023.1.31.
- 篠崎恵美子, 山内豊明 (2006) : 看護基礎教育におけるフィジカルアセスメント教育の現状 2005 年度看護・看護系大学の全国調査より, 看護教育, **47** (9), 810-813.
- 鈴木真由美, 田中敦子, 下島浩, 牧野寛美, 下村美枝子 (2021) : フィジカルアセスメントにおけるシミュレーション教育の学習効果の検討(第 2 報), 飯田女子短期大学紀要, **38**, 123-134.
- 高橋正子, 白井美帆子, 北島泰子, 中村充浩 (2013) : 看護系大学におけるフィジカルアセスメント教育に関する実態調査—教育の現状と必要不可欠な実技演習項目, 習得レベルについて—, 東京有明医療大学雑誌, **5**, 17-26.
- 山田巧 (2022) : 看護基礎教育における呼吸器系のフィジカルアセスメント教育へのプロジェクションマッピングの有効性, 日本医療マネジメント学会雑誌, **23** (1), 20-24.
- 山内豊明(2020): 看護師の臨床判断を支える基礎, 看護教育, **61** (9), 794-801.
- 山内豊明, 東山新太郎, 芝崎有紀 (2017) : 呼吸音聴診技能向上に資する双方向性 Web 教材の開発—学習者側の視点を中心に—, ヒューマンケア研究学会誌, **9** (1), 1-12.
- 吉田香, 美濃陽介, 畑瀬智恵美 (2021) : 訪問看護活動におけるフィジカルアセスメント技術の実態調査, 日本看護学教育学会誌, **30** (3), 127-136.